２０２５年０５月２２日 読売東京 朝刊 都民２ １３Ｓ版 ２２頁

作家の名が持つ風格

文人の武蔵野

村上春樹 ②

文学が未来を考える縁になり、生きる道を探る哲学になり、小脇に抱える文庫本の装幀がファッションになり、思想の表象にもなるという時代がありました。「政治と文学」がセットで論じられることもありました。

ところが今は、文字通り「多様性」の時代です。世代を超えて誰もが関心を寄せるような共通の話題は大幅に減りました。かつての「若者たちの神々」はインフルエンサーや推しにとって代わったように見えますが、村上春樹という作家の固有名には、まだ旧時代のカリスマ的風格の名残があり、若者の心を動かす力があるように思われます。

「新潮」（2025年5月号）は、刊行直後から話題になり、売り切れとなる書店が相次ぎました。それは村上春樹の最新作「武蔵境のありくい」が収録されていたことと無関係ではなさそうです。SNS上でも反響がみてとれます。

作品の主な舞台となる武蔵境（武蔵野市で）

つい先日、勤務先の大学の「武蔵野学」という講義で200人ほどの学生を相手に「武蔵境のありくい」について触れる機会がありました。授業後の反応をみると、すでに読んでいる自称ハルキストがいたり、アンチを名乗る学生もいたりと、他の作家の作品を扱うときとは違う反応があったのは確かです。

最寄り駅の一つですので、武蔵境（武蔵野市）をよく知る学生もいましたが、一度も行ったことがないという学生もいました。大半はどちらでもなく、「武蔵境」という地名の力よりも作品の力と作家の知名度に意識が向いているようでした。

小説「武蔵境のありくい」は、前作「夏帆」と同じく夏帆という女性の語りによって物語が進みます。武蔵境のありくいとは、人語を操り夏帆の前に現れ、「武蔵境に越さなくてはなりません」と呪文を唱えるように繰り返し告げる奇妙な存在です。

なぜ武蔵境なのでしょうか？

（敬称略）

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

＊

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。